

お茶大十三年、その感謝と希望

浅井辰郎

この13年は夢のように早かった。しかも嬉しいことの方がずっと多かった。

その第1は、それまでと違って欲しい器械や資料は大体叶えられたことである。この13号に書いた東半球大縮尺図16,000枚は萬波事務局長（当時）の尽力で買えるようになり、今、各教官や外部の特殊な研究者の宝となっている。着任3年目には特別設備費により、日本の地理学界では最初の赤外線温度計が輸入できた。これを手の届かない滝の水や建物の天井に向けると、立ち所にその表面温度が判る器機で、文教育棟を四季に測った結果は「気象— 建築シンポジウム」で大きな関心呼んだ。昭和45年度の科学研究費では共通用にMIIカメラが買え、上記大縮尺図の精密な複写によく用いられているし、教室所有となったジープは教官の調査、大学院の巡検に重用されている。同じ費用で購入した12点総合記録計など7種の気候観測器械は学生教育のほか、建物気候の観測に駆使され、その成果は日本気象学会や地理学会の予稿集に連載された。特別設備費で昨年9月輸入されたライマンα露点温度計は、直ちに大学院の講義に使われたほか、建物気候に新分野を拓こうとしている。また講座研究費は浅海先生のご好意で過分に使わせて戴いた年もあり、多くの自記計や百葉箱も備え付けられたのであった。

うれしかったことの第2は教務補佐員の存在である。週1〜2回、仕事を手伝ってもらうもので、教材準備は勿論、研究の進展に大いに役立った。数多い内外の農業統計から湿潤各国の生産力が算出できたのは瀬尾さんの力であるし、建物気候の研究がまとめられたのは太田・林両氏のおかげである。今印刷中の「アイスランド地名小辞典」が完成するのも勇・小尾・山川氏の力による。だから上記の器械があっても、又私1人がキリキリ舞いしてもこの成果は出なかった。

うれしかったことの第3は大学の刊行物が豊富なことである。「アイスランド全国地誌(1)〜(7)」や「地理量」の考を載せて戴いた人文科学紀要。「建物気候」や「アイスランドの山崩れ」を投稿できた自然科学報告。「地域相関量の変化」や「アイスランド地名」を3年間に2回も載せて戴いた博士課程の人間文化研究年報。それから高校併任中、その「修学旅行」2編と、高校の命取りとも思える「全入問題」を快く載せられた高校の紀要。いづれも全く感謝に堪えない。

うれしかったことの第4は、善意と熱意に溢れた方々に恵まれたことである。全入制打破に耳を貸して下さった井上學長、教室の運営・巡検の実施・卒論指導などにつき、常に真面目な討論と実行を続け得た同僚の教官諸氏。高校長の4年間、多くの難問解決に終始親身になって下さった桜井教頭。

いずれも正にそれらである。又上記の研究報告でも出版物でも日常の講義準備でも、解らない文献の探索や内容の究明に知恵と時間を貸して下さった図書館の貝山さん、図書館の岩渕さんなどはとくに印象が深い。

うれしかったことの第5は当然のことながら素晴らしい学生諸姉にお相手できたことで、在学中に楽しい思い出ができたことは勿論、卒業後、社会で大へん頼母しく活躍したり、立派な家庭を築いておられることである。賀状の端々に見られるこのような文字は、今後ますます私の心を躍らせてくれるであろう。

さてここで在學生に希望を出したいのは、近く高校は「現代社会」だけが必修になるため、地理学で教職につくことは必ずや急に狭い門になろうということである。これに対処する有効な手段は、「社会」だけでなく「理科」の免許状を持つことである。この取得はお茶大では一時困難視されたこともあるが、今は可能性が出て来た。どうか教官と一緒にこの手段を採るよう計画されたい。多くの私学の地理学科卒業生は20年以上も前からこの方法で就職を確保しているのである。

私は退官後もこの5つの基礎を特別に大切にしたい。そして今後も生活の資を戴ける以上、ささやかな研究でも今まで以上に社会に還元したいと思っている。どうか末永くとか、のんびりとではなく、ひたすらこの方向にご鞭撻を願ってやまない。